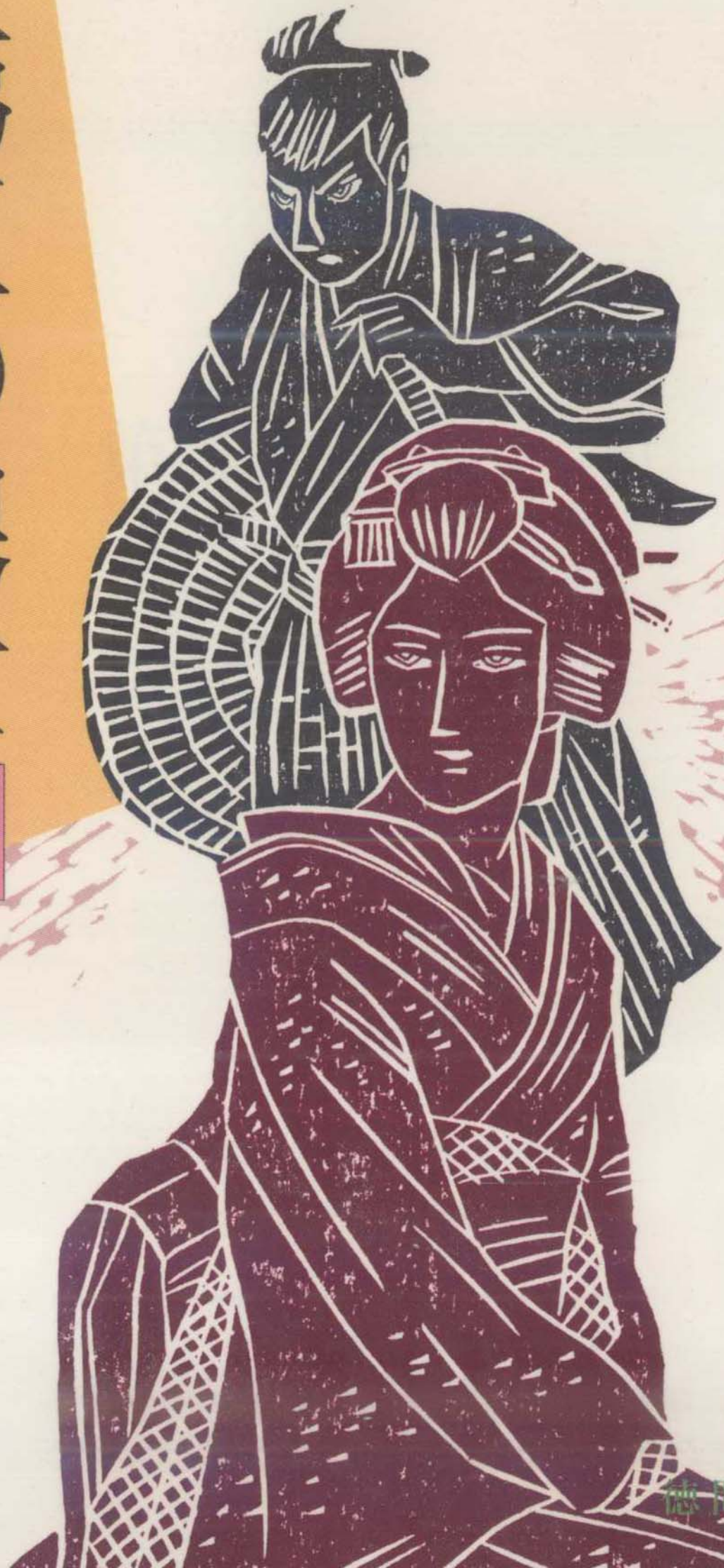


第二の浪士下

南條範夫



徳間文庫

徳間文庫



だいさん ろうし
第三の浪士 下

© Norio Nanjō 1990

㊦ - 1 - 23

1990年1月15日 初刷

著者 南 條 範 夫
なん じょう のり お

発行者 荒 井 修
あら い おさむ

発行所 東京都港区新橋四一〇丁一〇五
株式会社 徳間書店

電話(〇三)四三三・六二三一(大代)
振替 東京四一四四三九二番

印刷 凸版印刷株式会社
製本

〈編集担当 前島不二雄〉

ISBN4-19-568966-X (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

徳間文庫

第三の浪士 下

南條範夫



徳間書店

目次

加代 5

お琴 64

一進一退 112

会津若松へ 145

動乱の城下 170

最後の拠点 215

五稜郭 244

桑名三人組 282

有為転変 316

第三の途 365

解説 石井富士弥

403

加 代

大谷大作・梅沢保介並びに加代と金五とを乗せた船が、松島湾の東名浜に着いたのは、上野の彰義隊が壊滅してから十日目に当たる五月二十五日の朝である。すでに奥羽列藩同盟が成立して、薩長を主体とする官軍に対して抗戦の気構えが決まっていたから、海岸の警備はさぶるきびしい。

四人は、仙台から米を積んで千葉に来た回漕船が帰航するのに便乗させて貰ったのであるが、海岸に上陸すると同時に、仙台藩兵にとり囲まれた。隊長らしいのに、

「われわれは桑名藩の者です。上野で闘って敗れて逃れてきたのだ」

と、大作が弁明すると、

「桑名藩士なら、われわれの同志だ。しかし、これからどうするつもりか」

「ここで船を見つけ、津軽を回って、越後の柏崎へ赴くつもりだ」

「それは、とても無理だろう。北上する船はすべて、藩用に徴用されてしまっているし、かりに船がみつかったても、盛岡藩・秋田藩などは、薩長軍に協力しているから、海上でとり押えら

れる危険が多い」

「それなら、陸路、会津を横切って、越後にはいる」

「それも、どうか、会津領内いたるところに官軍が進出している。白河城も官軍に奪われてしまっておるし」

「しかし、わが藩公は越後におられる。どうしても、そこにゆかねばならぬ」

「お志は、ご尤もだ、強いて止めはせぬ。ご無事を祈る」

片腕を上野の戦いで喪失したという大作に敬意を表して、仙台藩兵たちは、かなり鄭重に扱ひ、仙台北城下へ案内してくれた。

城下の宿に一泊。

四人が額を集めて、善後策を考えた。

「敵の充滿しているところを抜けてゆくのは、相当な危険がありました。お加代さまは、仙台北にお残りになつては如何でございましょうか」

と金五がいえば、保介も、

「そうだ、女の身でとても越後まで行けるものではない。ここに残った方がよい。尤も、知らぬ土地にお許一人を残してゆくわけにはゆかねから、私が共々残ってもよい」という。

大作がたちまち、目を怒らせて、

「梅沢、きさま、体裁の良いことをいって、戦場が怖いものだから、加代どのと共に残るなどというのだろうか、意気地なしめ」

「そんなことはない。加代どのが独りでもいいというなら、おれも越後にゆく」

「ふん、途中で逃げるつもりか。何しろ、逃げ足は早いからな」

「ばかな、何をいう、おれは江戸でも、あの日、上野の山に馳せ戻って死のうとしたのを、加代どのに止められて、やっと思いとどまったのだ」

「とめられたのを、これ幸いと思ったのだと正直にいえ」

二人がいい争っているのを聞いていた加代が、

「お二人とも喧嘩はおやめになって下さい。私も皆さまとご一緒に参ります」

——それは無理ではないか、

と、金五が重ねていったが、加代はあくまでも三人と行動を共にするという。

「よし、それで決まった。加代どのも来るがよい。男が三人——梅沢を数に入れなくても、二人はいるのだ。加代どの一人ぐらひは護ってゆけるだろう」

大作は事毎に保介を侮辱するようなことをいうのだが、保介は、それに対して面と向かって堂々と反撃を加えることができない。

加代は、そのたびに、情けない思いをした。

——なぜ、この人は、もっと男らしくなってくれないのだろうか、

と、恥ずかしく思う。

翌朝、四人は仙台城下を出発した。南下して、亘理^{わたり}へ出て、白石^{しろいし}の南方を迂回^{うかい}して、若松に出る予定である。

その日のうちに、岩沼まで、どうやら無事にゆきついた。

阿武隈川^{あぶくま}を渡った途端に、河岸にたむろしていた官軍の一隊にとっつかまった。大垣藩士である。

「何者か、名乗れ」

と、ひどく横柄である。

このころ、奥羽地方に進駐した官軍の横暴ぶりは目にあまるものがあつたと伝えられている。奥羽各藩の藩士を侮辱し、罪もない町民を脅かし、甚だしいものは金品を略奪し、婦女を辱かした。

なかんずく奥羽鎮撫^{ちんぶ}総督参謀の世良修蔵^{せら}の暴慢な態度は、言語に絶するものがあり、ついに、閏四月十九日^{うるう}、仙台藩及び福島藩の決死隊のため、殺害されてしまったほどである。

「水戸の浪人、小谷三兵衛、倉沢保次郎、同人妻加代、若党、金五」

と大作が答えると、

「水戸の浪人が、こんなところで、女連れで何をうろうろしているのか」

「所用あつて、岩沼まで参った。これより水戸へ戻るところ」

「関所手形をみせい」

「取り急いだため、手形を持参しておらぬが」

目付きの鋭い男が、一步前に出て、

「手形がなくて、白河の関所を、どうして通る気か、いや、どうして通過して岩沼へ行くことができたのか」

「水戸から、海路——」

といいかけるのに、追つかぶせて、

「われわれが知らぬと思っておるのか、痴^しれ者！」

「なにッ」

短気な大作が、早くも喧嘩腰になる。

「たわけめ、うぬらのその言葉のなまりが水戸の者でないことをはっきり示しておる。そのくらしいことがわからぬおれたちと思っっているのか」

「理不尽な言い掛かり——」

「ふん、その片腕は何とした、いってみろ、どこでそうなった」

「無礼な、これは数年前、不慮のことで、切断し——」

「数年前？　ほう、傷口をみせて貰おう」

いきなり、大作のだらりと垂れている左の袖^{そで}を、きっとまくり上げようとする。

「武士に向かつて、何をする、慮外千万」

さつと一步退いて身構えた大作に、相手の男が、嘲笑を浮かべて、

「良い加減で、正直なところを白状しろ、さもなければ、痛い目にあわすぞ」

「かねて官兵の横道は聞き込んでいたが、聞きしにまさる乱暴だ、通せ」

「通ってみろ」

「おお」

大作が、三人に目配せして、さつさと歩き出そうとする。

「おい」

と、官兵の一人が、呼びとめた。

「何、まだ文句があるのか」

「うぬの背後をみる」

といわれて、思わず四人が振り向いた。

鉄砲が四挺、筒口をぴたりと四人に向けている。

「勝手に動いてみる、容赦せず**にぶつ放すぞ**」

「卑怯者！」

「黙って、おれの後について来い」

大作は、齒ぎしりした。金五が、目配せして、

——ここは、おとなしくした方がよい、

と知らせる。官兵に囲まれて、亘理の町に連行された。

官軍の幕舎になっている大碓寺おおすという大きな寺に連れ込まれた。

「隊長、怪しい奴やつを四人、召し捕って参りました」

と報告を受けた隊長の武石重衛門が、縁の上から傲然ごうぜんと見おろして、

「何者か、正直にいえ」

もう、匿かくしてもむだだし、第一、これ以上の侮辱にはたえられないと考えた大作が、昂然こうぜんと胸を張って答えた。

「桑名藩士大谷大作と梅沢保介、あとの二人は、単なる旅の道連れだ」

「桑名か、桑名は朝廷に帰順したはず、おのれらは脱藩者だな」

「ばかな、桑名藩は降伏などせぬ。藩公は越後で闘っておる」

「ふん、それで、越後へ行こうというのか、間抜けめ」

「どうとも処分しろ」

「連れの二人は道連れというたな、なかなか美形じゃな、こんな道連れなら、おれたちも欲しい」

「二人は桑名に関係ない、放してやってくれ」

「そうはゆかぬ。じっくりと取り調べた上でなければな」

武石が、加代の全身を、じろじろとなめるように眺めて、にやっと笑った。部下を顧みて、

「おい、この二人を仮牢に叩き込んでおけ、こっちの二人は、おれが調べる」

と命じた時、加代が、

「私は、梅沢の許嫁です」

と、はつきりいった。

「改めて調べて頂かなくても、これだけ申せばよいでしょう。梅沢と同じに扱って頂きます」

——まずいなあ、お嬢さまは正直すぎらあ。

金五が、顔をしかめた。

武石が、目を細めて、

「ほほう、立派なものだ。よし、それではその梅沢という男と、この娘とを、あちらに連れてゆけ。あとの二人を、仮牢に入れておけ。処分は追って沙汰する」

と、どういうつもりか、保介と加代の二人を、庫裡の一室に連れてゆかせ、大作と金五とを、仮牢にあてていた境内の一棟の中に閉じこめた。

「拙いことになった。もう少し我慢すればよかったかも知れぬ。おれはいつも、この短気で失敗する」

大作がさすがに少々、気を落として呟く。

「なあに、大谷さま、ご心配いりません。このくらいの仮牢から脱け出すぐらい、大したことではありません」

金五の方は、平然としている。

「脱け出せるか」

「お任せ下さい」

「どうやって出るのだ」

「夜まで、待ちましょう」

金五はのんびりと仰向けにひっくり返って、天井のない屋根裏をみている。大作も仕方なしに、同じように仰向けにころがった。

「金五」

「はあ」

「あいつら、梅沢と加代どのとを連れて行ったが、どうする気だろう」

「さあ、わかりませぬ。存外、情けを知る奴で、若い許嫁とみて、助ける気になったのかも知れません」

「あいつらに、そんな人情があるかな」

「あるいは、あのお二人なら、容易に口を割るとみて、何かの情報を探り出そうとしているのかも知れませぬ」

「それならむだ骨折ることになる。われわれは何も知らないのだからな」
暗くなったが、灯り^{あか}はくれないし、食べ物も何一つ与えられない。

「少々、腹がへったな」

大作が、のんきな事をいった。

「では、出かけましょうか」

金五が、ひよいと立ち上がると、途端に姿が消えた。

——あ、

大作が、びっくりして、

「金五」

「静かに」

頭の上で声がした。金五は、一跳ねして、天井のたるきに取りついていたのだ。

明るいうちに、じっと見て研究しておいたのである。しばらく何やらごとごとやっていたが、間もなく、屋根の一角に穴をあけた。そこから、するりと、屋根の上に姿を消していったが、すぐに顔を覗^{のぞ}かせて、

「大谷さま」

と、小声で呼ぶ。

「どこだ」

「ここです。そこにある木箱の上ののって手を伸ばして下さい」

大作の右手を、引っぱってぐいと屋根の上に引き上げた。からだに似合わない素晴らしい力である。

「こちら側には誰もいません」

金五は、猫のように、音も立てずに、地上に飛び降りる。大作もつづいて飛び降りようとして、躊躇した。金五のようにはできない。大きな音を立てるだろう。まして片腕失っているので、バランスがとれぬ。ひっくり返るかも知れないのだ。月明りの中で、金五が片手をあげて制止しているのが見えたので、大作は屋根にぴたりと身を伏せた。金五が、どこかに走って行く。

やがて鐘楼の近くで、大きな物音がした。

「何だ、あれは」

飯牢の入り口の前にしゃがんで、半分居眠りをしていた番卒が、目をさまし慌てて、その方へ走ってゆく。

「大谷さま、今のうちに飛び降りて下さい」

金五の声がした。大作は、飛び降りた。金五は、まるで勝手知った自分の家でもあるかのように、

——こちらへ、こちらへ、